

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-33C	16-031	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Tobacco and alcohol consumption after total laryngectomy and survival: A German multicenter prospective cohort study. 喉頭切除患者における喫煙と飲酒の生存率への影響：ドイツにおける多施設コホート研究		
執筆者		
Eichler M, Keszte J, Meyer A, Danker H, Guntinas-Lichius O, Oeken J, Pabst F, Singer S.		
掲載誌		
Head Neck. 2016 Sep;38(9):1324-9. doi: 10.1002/hed.24436.		
キーワード		PMID
生存率、喫煙、飲酒、喉頭切除術、コホート		27043145
要 旨		
目的： 喉頭全切除患者における喫煙と飲酒の状況とその後の生存率の関連を、社会経済的要因を調整して検討する。		
方法： ドイツの 12 医療機関から成る多施設共同コホート研究を実施した。2001-2011 年に喉頭切除術が計画された患者対象とし、追跡終了時点は 2014 年 12 月までとした。術前から術後 3 年間の 6 時点における喫煙・飲酒状況により、その後の生存率が異なるかについて、同居人有无を含む社会経済的要因等を調整した多変量コックス回帰分析を用いて検討した。		
結果： 359 人が対象となった。対象者の 89%が男性（平均年齢 58 歳）で、平均追跡期間は 5.4 年間だった。社会経済的要因としては、同居人ありが約 65%、ブルーカラー労働者が約半数、初等中等教育レベルが約半数、低所得階層が約半数であった。飲酒状況については、アルコール摂取量 0-720g/月の者に対する、720g/月以上飲酒継続者の死亡ハザード比 (98%CI) は 2.19(1.30-3.67)、飲酒量変化が認められた者では 0.64(0.42-0.98)、飲酒量変化の可能性があった者では 0.85(0.58-1.25)だった。一方、最終喫煙状況については、禁煙者に対する喫煙継続者の死亡ハザード比は 1.31 (0.87-1.96)、非喫煙者は 0.88 (0.50-1.59) だった。		
結論： 本研究においては、喉頭全切除後も大量飲酒を継続していた者の死亡リスクは適量飲酒者の約 2 倍、喫煙継続者は禁煙者の約 1.3 倍であった。		